

一般男性の幻想入り

狂助

普通のサラリーマンが幻想入りするだけのお話。

目次

一般男性の幻想入り（？）	1
一般男性は永遠亭送り	7
一般男性は目を覚まさない	13
一般男性は夢の中	17
一般男性の目覚め	23

一般男性の幻想入り（？）

書きたかったから書いた。

それだけです。

真夜中、酔っぱらい達の喧噪どころか人っ子一人いない午前3時。一人の男性が夜道を歩いていた。相当疲れているらしく足取りが覚束なく顔色も悪い。そんな彼の前に一人の綺麗な女性が現れた。

「……は？」

訳が分からなかった。何も、誰も無かったはずなんだ。なのに、空間に亀裂が入り女性が出てきた。

「ちよっ！」

だが、重要なのはそこじゃない。いや、重要だけどそれ以上に状況がマズい。なぜなら彼女が出てきたのは車道の下真ん中。しかも、ちょうどトラックが差し掛か

る所なんだから。それを見た瞬間、俺は走り出した。なぜかは分からない。ただ、彼女を助けないと！と思ったからだ。

「危ない！」

彼女の手を掴み、引っ張る。その反動で彼女と俺の場所を入れ替わり、そして俺は……。

博麗大結界が異常を示していると藍から報告があつた。珍しいことだけど、まったく無い訳じゃ無い。

（霊夢も少しは気に掛けてくれても良いのに）

修復のためにスキマをくぐると何故か外の世界に来ていたの。とりあえず戻ってスキマを開き直そうと考えていると誰かがなにか叫んでいる。

（随分、低い声だけど）

こんなブサイクに声を掛けるなんてどんな人なのかと思ひ声の方を向くと男性がこちらに走ってくる。

（おおおお!? おお、男!?）

この世界で貴重なはずのな男性が私の手を取った。

(えゝ!?)

手を取られた。もう一度言おう。手を取られたのである。幻想郷トップレベルの、自他ともに認めるブサイクなのに。が、それも一瞬。彼は私の視界から姿を消し、代わりに外の世界でよく見る車が視界に入ってきた。

かつて経験したことの無い衝撃が体を襲う。体が蹴られたボールみたいに吹き飛ぶ。その衝撃で腕と足は決して曲がってはいけない方向に曲がっている。それを認識した瞬間、痛みが襲ってくる。痛すぎて鳴咽を吐くことさえできない。と同時に脳裏に浮き上がるのは今までの人生で経験。

(これが走馬燈ってやつか)

高校受験で志望校に合格できずに泣いた記憶。大学受験で志望校に合格したときの記憶。大学の他の学生たちよりも早く内定をもらってニヤニヤした記憶。こう振り返って見ると、

(薄い人生だったな)

特に親しい人が居たわけでも無い。彼女はいたが結局別れたし。だけど、もうどうでも良い。俺の人生はここで終わる。心残りがあるとすればパソコンに保存している秘蔵のデータ達だが、

（まあ、誰かの目に入ることも無いだろう）

そして、俺は意識を手放した。

「えっ、えっ。あっ」

紫はパニックになっていた。当たり前だ。出るはずのない外の世界に出てすぐに男性に触られた次の瞬間、車にはね飛ばされたのだから。いくら永い時を生きる彼女でも、こう次々と事が起こればパニックにもなる。パニックを脱し、慌てて男性に駆け寄るが見るからに死にそうだ。

（どどどど、どうすれば！どうすればどうすればいいの!?!）

分からず立ち尽くす。が、そのままにしてしまえばこの男性は死んでしまう。

「永琳のところなら！」

月の賢者なら彼を救うことが出来るはずだ。彼を背負い、スキマを開く。

(お願い。死なないで！)

今後の流れとか一切、考えていません。

一般男性は永遠亭送り

多くのUA、しおり、お気に入り、ありがとうございます。
東方Projectという作品の凄さを再認識しました。
なんとか続けられた二話目です。

ドンドンと戸を叩く音が聞こえる。こんな夜中に迷いの竹林を抜けて永遠亭に来ることが出来るのは妹紅ぐらいしかいない。大方、人里で出た急患でも連れてきたのだろう思い、うどんげを起こしその足で玄関に向かう。

「妹紅、急患かし……ら……」

そこに居たのは、

「永琳！彼を助けて!!」

今にも息絶えそうな男を背負った大妖怪の賢者だった。

「ちょ、ちょっと、それ男!? 一体、どこから」

「いいから、さっさと助けなさいよ!!」

「うどんげ! 手術の準備よ! 急いで! 紫、彼を部屋まで運んで」

「分かったわ!!」

「彼は!？」

「手術は成功したわ。あとは彼の生命力次第よ」

「そう……。よかったあ……」

「で、あんなイケメンどこで捕まえてきたのよ。場合によっては霊夢に退治してもらわよ」

「事情はまた今度。しばらく彼のこと頼んだわよ」

「あ! ちよっと!」

逃げられてしまった。訳も分からず看病するこっちの身にもなって欲しい。とりあえず、

(一番、奥の部屋に入れておきましようか)

一番、人の目に付きにくい場所へ。希少な男が入院していることが周りにバレれ

ば、珍しいもの見たさでここに来る命知らずもいるかもしれない。

（まあ、いないとは思うけど）

ここは永遠亭。有事の際以外で行きたくない場所ランキング第一位なのだから。

（昨晚はやけに騒がしかったわね）

蓬莱山輝夜は無職のお姫様。自由気ままな生活を送る彼女の生活リズムはガタガタで深夜まで永琳が作ったテレビゲームに熱中するなんてことは良くあることだ。

（永琳か鈴仙に話を聞きましょうか）

日はとくに真上に上がっている。この時間帯ならきつと、いつもの製剤部屋にどちらかは居るだろうと思い、そこに向かう。

「姫様、もうお昼ですよ」

「いいじゃない、別に。いつもの事なんだから」

「いいのよ、うどんげ。姫様の出不精は今に始まったことじゃないから」

分かってるじゃない、永琳。今の生活を改める気はさらさら無いわ。そもそも、この容姿じゃ気楽に出かけられないしね。

「昨日の夜は随分、騒がしかったわね。急患でも来たのかしら」

「あゝ、そうなんです。その……」

うどんげの口ごもり、永琳の方をチラチラ見ている。私に言っても良いのか判断が付かないらしい。

「どうせ連れてきたのは妹紅でしょ。なんか言ってた？」

「違いますよ。連れてきたのは紫です」

「あのスキマが？」

基本的に自分のねぐらから出てこない奴が一体、何をしに来たんだろうか？

「はい、紫が男を連れてきてまして。……重傷の」

「……。面白い冗談ね」

こんなブサイクの巣窟にやってくる物好きは女でもないのに、まして男なんて信じられる訳が無い。

「意識の無い男性を紫が背負ってきたんですよ」

「……。それ、霊夢に退治してもらったほうが良いんじゃない？」

割と本心からそう思った。

ここだけの話。千字ちよつとの文章を書くのに一週間かかりました。
ため息が出ます。

一般男性は目を覚まさない

今回は一週間切れましたね。

……誤差ですね。はい。

瀕死の男性が妖怪の大賢者の手によって永遠亭に担ぎ込まれて二週間がたった。

この男性について後から説明すると言った、大賢者は未だ現れない。そして、

「目を覚ましませんね、師匠」

彼もまだ目を覚ましていなかった。

「つつい手足の骨折に目が行ってしまうけれど、頭部へのダメージも相当だったのよ。下手したら一生このままの可能性もあるわ」

「そんな……」

「……。あとは彼の生命力次第ってところかしら」

脳は人体の中で最もデリケートかつ重要な部分。いくら月の技術があると言って

も、そう簡単に手が出せる訳では無い。彼の生きたいという思いが折れないことを祈るばかりである。

「……。姫様は？」

「朝からずっと彼のところです。てゐに頼んでイナバ達を監視に付けています」

「なら、いいわ。さすがに重傷者相手に変なこととはしないと思うけど……」

さすがに身内というか、自分の教え子が性犯罪者になるのはごめんだ。

輝夜は今日も彼が眠る部屋に来ていた。彼が永遠亭にやって来てからの日課になっっている。

（まだ目が覚めないのね……）

早く目を覚まして欲しいと願う。だが、それと同時にこのまま目を覚まさないで欲しいとも願う自分があるのが腹立たしくてたまらない。それもそのはず。輝夜は幻想郷一のブサイクと言われている。そのブサイク度は紅白巫女に「二度と会いたくない」と言わせるほどだ。そんな彼女が男の顔を見る、まして男の体に触れることはこの先二度と無いことと言っても過言では無い。そんな彼女にとって、この状

況は大変喜ばしい物だ。出来れば一生続いて欲しいぐらいには。

（さあ、部屋に戻りましょうか）

イケメンを鑑賞し満足すると同時にムラムラしてきた彼女はそれを治めるために部屋に戻る。その場でシてもよかった、というかシたかったがイナバ達の目がある以上、下手なことは出来ない。もし、そんなことをすれば出禁を食らうのは確実である。そんなことをされれば、この先生きていく自信がない彼女はそそくさと部屋に戻り、催してきた劣情を治めるのであった。

今、私は配下のイナバ達と一緒に姫様を監視している。鈴仙がどうしても頼むので人里で人気の羊羹を条件に監視を引き受けた。最初は姫様の何を監視するのだろうかと思っていたが、それもすぐに分かった。姫様は担ぎ込まれてきた男に一目惚れしたらしい。証拠は毎日、足繁く部屋に通っていることとその後、必ず耽るのだ。ナニとは言わないけど。本人はバレていないと思っているが、みんな知っている。ただ、言わないだけで。

（……。ちょっと羨ましいうさ）

私と鈴仙はできる限り彼に接触しないように永琳から言われている。薬を飲めば、別に良いらしいのだがその薬の味はこの世の物とは思えないほどマズい。あれを我慢してまで、あの男に会う気はない。

（早く目を覚まして欲しいうさ）

そして、さっさと出て行けうさ。

では、また一週間後にお会いしましょう。

一般男性は夢の中

『一週間後にお会いしましょう』とか言って、半年もお待たせして申し訳ないです。
失踪はしませんよ。

フヨフヨと浮遊感を感じる。空中に浮いているというよりは水の中を漂っている
という感じだ。

(どこだ、ここ?)

なぜだか体が動かない。目だけ動かし、辺りを見るが何も無い。ただただ灰色の
空間が続いているだけであった。

(どうしてこんな場所に?)

何も思い出せず疑問ばかりが浮かんてくる。なにか一大事が、人生を左右するよ
うな一大事があったような気がするがそれを思い出すことが出来ない。しばらく
思い出そうと努力したがその甲斐なく何も思い出せず、代わりに猛烈な眠気が彼を

襲った。

（さっきまで寝ていたはずなのに）

変わらず疑問だらけの彼だが、ここは体の生理反応に従っておくとした。願わくば目が覚めたとき、状況が変わっていることを祈って。

また目を覚ました彼だが、相も変わらずそこにあったのは灰色の空間であった。変わらない状況に落胆する彼だがすぐに異変に気付く。

「……………体が動かせるな……………」

眠る前は指先一本も動かせなかったのに、今では体を十全に動かすことが出来る。浮遊感はあるが、水の中を泳ぐ要領で移動も出来る。自由を得た喜びもつかの間、辺りを見渡すと『窓』のような物がポツンと存在していた。これも眠る前にはなかった物だ。

「パソコンのモニター……………か　？」

その『窓』の前まで移動すると、それまで何も映していなかった『窓』に砂嵐が生じ、次の瞬間には幼い子供がそこには映っていた。どこかで見たことのある風貌

であったが思い出せない。『窓』の中の子供は3歳ぐらいに見えるが、その周りには大人の姿は無い。ただ、無心で塗り絵を塗ったり絵本を読んだりしている幼児が映るだけである。

(……小さい頃の俺みたいだ)

まだ幼稚園に入るぐらいの頃、両親は共働きでなかなか俺にかまってくれなかったのを思い出す。懐かしい記憶に浸っていると『窓』の中の幼児に変化があった。それまで無心で塗り続けた塗り絵を放り出し二人の大人の元に駆け寄っていった。アングルが変わり、両親と思われる男女の顔が明らかになる。

「これ、父さんと母さんだ……。」

そこに映っていたのは、とうの昔に帰らぬ人となった俺の両親だった。ということは、

(この小さい子は俺か?)

俺は小さい頃の自分の写真を見たことが無いので、この幼児が俺だとは分からなかった。三人は手を繋いで幸せそうに夕暮れの中に消えていった。と同時に砂嵐が生じ、『窓』そのものが消滅した。

（一体、何だったんだ？）

と考え込んだ瞬間、ドドドドツという何かが崩れるような音が響いてくる。辺りを見回すと、至る所にヒビが入っていく。

まるで、この灰色の空間そのものが崩壊していくようだ。

「一体、何が!？」

必死に手をかき足をバタつかせ、その崩壊から逃れようとするがもう遅い。彼はこの崩壊に飲まれ気を失った。

「フツッ、ようやくお目覚めかしら。お寝坊さん」

幻想郷のどこか。彼女と彼女の眷属たちの屋敷。

その一室で彼女は笑っていた。

彼がこの屋敷に来る日は近い。

雰囲気だけお楽しみください。作者は頭が悪いので伏線などは張れません。
次話は今月末に投稿予定です。お楽しみに。

一般男性の目覚め

毎度、毎度遅れて申し訳ないです。

今回は胃腸炎で寝込んでました。

ユルシテ、ユルシテ

今日も輝夜は彼の部屋に向かっていた。もちろん日課のイケメン鑑賞である。

「やっぱり、朝は彼の顔を見ないと元気が出ないわ」

輝夜の中ではもはや、彼は一種の精神安定剤になっていた。これまでに受けてきた心の傷を彼で癒していたのである。

「はーい、ご開帳！」

彼女は悪くないだろう。彼がここに運び込まれて、もう一ヶ月。その間、彼は一度も目を覚ましていない。その兆候もなかった。そして人は状況に慣れていくものだ、良くも悪くも。だから、彼女は『彼がもしかしたら目覚めているかもしれない』

可能性なんて、つゆほども考えなかったのである。

眼が覚めると、見知らぬ天井が広がっていた。

（ここ、どこ？）

病院のような消毒液の匂いはなく、木と畳のい草の日本人なら誰でも親しみを持つ香りに包まれている。

（屋敷……なのか？）

少なくとも病院ではないのは確かだ。そうすると、ここがどういう場所なのか気になる。

（でも、勝手に出歩くのはなあ）

どう考えても自分の家ではないし、親戚にもこんな昔ながらの屋敷を持っている人はいなかった。完全に赤の他人の家だ。そんな所を部外者が歩き回るのは気が引ける。人を待つか、それとも人を探すかで迷っていた彼の耳に足音らしきものが聞こえてきた。

（もしかしたら、俺を連れてきた人かもしれない）

そうでなくても、何かしら事情を知っている人であればそれでいい。そう思い、足音の主がこの部屋に入ってくることを祈っていると、障子が動いたとおm

「はーい、ご開帳！」

……やたらとテンションが高い美女が入ってきた。

障子を開けると、そこにはイケメンが寝ているはずだった。

実際は、

「は？」

起きていた。イケメンはきょとした顔でこちらを見ていたのである。

「あの……」

「はあああああああ！？！？！？」

いつかは起こるはずの事態であったのにまったく考えておらず、あまつさえ心の準備さえもしていなかったのである。パニックを起こすのも当然だ。しかし、それでも、

「全力で逃げる事はないんじゃないかなあ……」

「えー！いー！りー！んー！」

彼女は走った。それはもう万年、引きこもりとは思えないほどの速度であった。

「永琳！」

永琳のいる製薬室まで、その間わずか5秒である。

「朝っぱらから何ですか！騒々しいですね！」

「おおお！おおお！ととと！ここ！が！」

「何言ってるか分からないので落ち着いてください。はい、深呼吸して！息を吸って、吐いて。吸って、吐いて。お水、どうぞ」

「スーハー、スーハー。……ありがとう、永琳」

もらった水を一息に飲み干して、一息つく。

「じゃなくて！永琳、あの男が！目を覚ましたの！」

瞬間、拳が飛んでくる。

「なんで、言わないんですか！」

「痛い！」

皆さんも季節の変わり目は気をつけましょう！
予定は未定。

一般男性の幻想入り

著者 狂助

発行日 2020 年 10 月 8 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/183284/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
